

目次

序章 小さな谷の住人たち

何かが崩れていく／エレファントカーブ／橋を作ったのは誰か？／
日本人の寂しさ——小さな谷の住人たち／本書の構成

7

第一章 シン・芸術立国論

『芸術立国論』／停滞の本質／いい政治家を演じる／精神の構造改革／
モノが人を幸せにできない時代／三つの寂しさと向き合う／
再び、シン 『芸術立国論』／そして、この四半世紀

24

第二章 芸術の多様な役割

健康で文化的な最低限度の生活／コロナ禍における芸術文化／
命の次に大切なもの／芸術文化の三つの役割／

60

なぜ、韓国は文化予算が多いのか／コミュニティ形成のために／
コミュニケーションの視点から見た演劇の起源

第三章

芸術と観光・医療・福祉

芸術と観光／文化観光／ナイトタイムエコノミー／但馬の観光課題／
インバウンド客の行動動線／兵庫県の観光課題／芸術文化観光専門職大学／
社会的処方箋／演劇情動療法／障害者アートの意味／
障害者アートは障害者のためだけにあるのではない／芸術と医療のつながり

第四章

新しい広場を作る

地方都市の衰退／コミュニティスペース／市場原理は地方ほど荒々しく働く／
経済合理性の落とし穴／規制緩和は人々を幸せにするか？／
若者たちの居場所がない／都市における居場所／渋谷の未来／
子どもの居場所／新しい広場を作る

第五章 文化による社会包摂

公共文化施設の新しい役割／ホームレスプロジェクト／失業者割引／
社会的孤立／二つの不幸／人間を孤立させないための第三の共同体／
社会包摂の本当の意味／伝わらない感覚／女性が遊び続けられる社会／
孤独と向き合う力

133

第六章 少子化対策と地方創生

スキー人口の減少／少子化対策の限界／若者は雇用で進路を決めない／
戻りたくなる町／『木綿のハンカチーフ』シンドローム／
戻って来ない理由を考える／医療・教育／そして文化／岡山県奈義町／
血の通った子育て支援／しごとコンビニ、こども歌舞伎、独自の教育政策／
北海道東川町／小さなネットワーク社会

161

第七章 文化格差、体験格差

大学入試改革／四国学院大学の新制度入試／Connecting the dots／
仲間を集める試験／身体的文化資本／「身の丈発言」

194

終章 芸術と民主主義

奈義町長選挙／目立っては負けというゲーム／二〇二一年豊岡市長選挙／
日本型トランプ選挙／現職敗北の理由／地方行財政の仕組み／
トリクルダウンは起こらない／汗を流す／二〇二五年豊岡市長選挙／
豊岡演劇祭／但馬と日本の未来

217

あとがき

寂しさの国／共感力を編み直す／出会いのための芸術／
「寂しさ」と向き合うために

242

序章 小さな谷の住人たち

何かが崩れていく

何かが崩れていつている。あるいは、何かのたがが外れてしまったと、一定数の方々が感じているのではないだろうか。

その「何か」とは、民主主義そのものかもしれないし、それを支える選挙制度かもしれない。いやもつと深い、日本社会そのものが抱える問題と捉える人もいるだろう。ここで言う「たが」とは、狭義では、「公人は、それだけは言っではいけない」「心の底で思っただけでも口に出しては言わない」、そういう暗黙の了解のようなもの。広義に捉えるならば、もう少し薄気味悪い、無意識の憎悪の蓋が開けられてしまったような感覚。

二〇二四年七月の東京都知事選挙。掲示板のポスターの掲載権を売買するといった従来の選挙制度が想定していない事態が相次いで起こった。続く二〇二四年十一月の兵庫県知事選では「二馬力選挙」という、これも公職選挙法の盲点をつくような問題が浮上した。また都知事選以上にフェイクニュースがさまざまに流れ、従来の「公正な報道」を墨守したテレビ・新聞は「オールドメディア」と揶揄やぶされて、その影響力が低下していく。

あけて二〇二五年六月の東京都議会議員選挙では、選挙演説中の罵り合いや、選挙活動に名を借りたヘイトスピーチが常態化し始める。そして七月の参議院議員通常選挙。排外主義を隠さない勢力が台頭し、多くの偽情報が人々を翻弄した。

「民主主義の危機」と言われるものは戦後幾たびもあったし、二〇二四年から二五年夏にかけての一連の選挙騒動も、一過性のものだと考えることもできるだろう。私もそう思いたい。いまは過激な参政党であっても、日本維新の会がそうであったように、公的な政党活動をしていく上では角が取れ、やがてマイルドになっていくのかもしれないし、そうならなければ、いずれ飽きられるのだろう。これもそうあって欲しいと願う。

そもそもこういった「たが」の外れ方は、二〇一六年の一度目のトランプ現象から始まったとも言える。あるいは安倍政権こそが、このたがを外してしまった元凶だと考える人

もいるだろう。どこまで遡ればいいのかはわからない。実は私自身、五年ほど前に「ミニトランプ選挙」のようなものに巻き込まれた経験もある（この件は本書で詳しく触れていく）。

だが、私がいま問題にしたいのは、どうもこの、日本で起こっている一連の出来事の特徴が、トランプ現象のような過熱ではなく、欧州で起こっている排外主義のような過激さでもない点だ。「日本人ファースト」と言っても、日本人はまだ外国人に職を奪われてはいない。いま私が住んでいる兵庫県北などでは、これから多くの外国の方に働きに来ていただかないと、産業も福祉も成り立たないことは目に見えている。インバウンド観光は、すでに日本の外貨獲得の命綱だ。いったい何が不満なのか？ いったい何に「日本人」はいらついているのか？

「格差」が原因だと多くの有識者は言う。その分析や書籍も多く出ているし、それらの研究、検証の一つひとつは切実で、ほぼ正しい。だがしかし参政党や日本保守党の支持者たち、あるいは安倍晋三氏を支えた岩盤支持層にしても、それは最貧困層と直接重なってはいない。よく知られるように、かつてヘイトスピーチを行ってきたのも正規雇用の中間層が多かった。

いま起こっているのは、おそらく、何かへのプロテスト（抵抗）ではない。だから「格

「差」を声高に叫んでも、その声は届けたいところには届かない。

では、原因はなんだろう。

エレファントカーブ

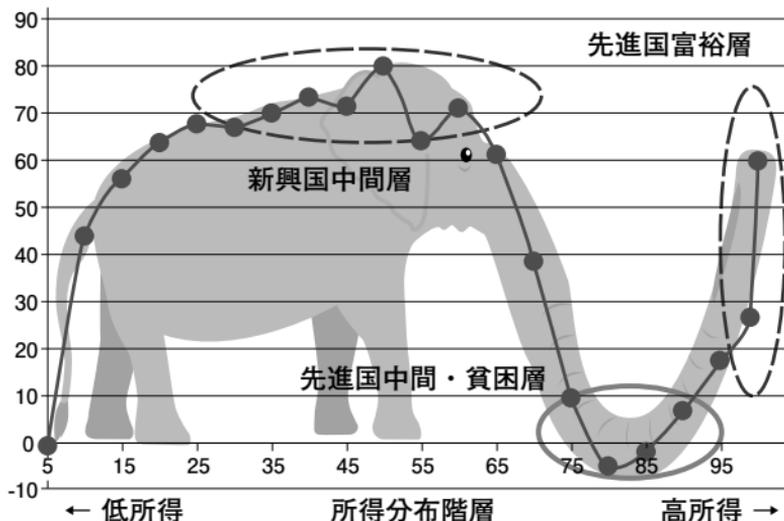
二〇一二年、世界銀行のエコノミストだったブランコ・ミラノヴィッチによって発表された「エレファントカーブ」という概念は、その数年後に起きたトランプ現象を明快に説明する理論として注目を集めた。

左の図の通り、エレファントカーブとは、一九八八年から二〇〇八年までの二〇年間のグローバルな所得成長率を分析したものだ。横軸（X軸）は世界全体の所得分布階層を示す。世界の人口を百等分して左から右に並べている。縦軸（Y軸）には一九八八年からの二〇年間の各所得階層の所得の伸び率（成長率）が示されている。

この図によって「世界の所得階層の特定の位置にいる人々が、該当する二〇年間、おおむねどれくらい所得が伸びたか」を把握することができる。このグラフの線が象のシルエツトに似ているところから、エレファントカーブと名づけられた。

図 エレファントカーブ

1988～2008年の各所得階層の所得の伸び率(%)



出典：ブランコ・ミラノヴィッチ『大不平等—エレファントカーブが予測する未来』（みすず書房、2017年）を基に作成

X軸のもっとも左端はアフリカなどの最貧困層だろう。この部分は、おそらく二〇一〇年代からのここ一五年ほどで相当改善されたと見られるが、二〇〇八年までの時点では長い内戦や政治的な混乱などが理由で、貧困からまったく抜け出せなかった状態の階層だ。象の尻尾の先端にあたる。

そこからX軸を右にたどると、象の尻尾から尻のあたり、ここが世紀末からミレニアムにかけて貧困から抜け出しつつある層。そして大きな象の背中が東南アジアやインドなど、平均所得はまだまだ低い、グローバル化の恩恵もあって急成長を遂げ、最貧困から

は脱した階層。だから中国は、おそらく象の頭部のあたりにいるのだろう。

もちろん、これは国ごとの分析ではなく、あくまで世界の人口と所得の関係なので例外も多いが、韓国、台湾はいま成長が止まりつつある眉間から鼻にかけて。そして先進国の下位中間層、すなわち日本で言えば年間所得が三〇〇万円前後の人々が象の鼻の折れ曲がった部分。ある程度の所得はあるが、成長が止まった階層だ。その先、上を向いた象の鼻先は、ITバブルの長者たちといった超富裕層で、ここは所得が伸び続けている。

二〇一六年の米大統領選挙において、トランプ現象を説明するために、このエレファントカーブはよく用いられた。ドナルド・トランプ氏の支持層の不満の背景を解き明かすのに、この理論がきわめて明晰めいせきだったからだ。

トランプ支持者の過半は新興国の人々よりも所得は高い。もちろん為替の問題や、国ごとの物価の違いもあるから単純な比較はできないが、それを前提としても、おそらくアメリカの下位中間層は、東南アジアの新興国中間層よりも経済的には比較的豊かな生活を送っている。問題は、その対比ではない。この二〇年、所得が伸びなかった自分たち、物価上昇によって可処分所得が少しずつ目減りしてきた自分たちよりも、新興国中間層の所得

が伸びていることが許せないのだ。そして、かつて自分たち労働者の味方だったはずの民主党政権の施策が、人権や多様性の名の下に、この新興国中間層を優遇しているように見えてしまう。自分たちの努力が報われないのに対して、「あいつらはうまくやっている」とも感じてしまうのだ。

同じ二〇一六年、民主党の大統領予備選挙に出馬したバーニー・サンダースは、この下位中間層の不満と怨嗟えんさを、超富裕層に向けようとした。しかし彼は予備選段階でヒラリー・クリントンに敗れる。その真っ当に見える主張は一定の支持は得たが、民主党支持者の中でさえ多数を占めるには至らなかった。一方、共和党のトランプ氏は、この怨嗟を新興国中間層の象徴であるニューカマー（移民）たちに向けてことで、いわゆる白人貧困層の心をつかんだ。

橋を作ったのは誰か？

私はこの時期、トランプ支持者の気持ち、特になぜ従来の民主党支持者たちもトランプ氏を支持するかについて、往年のフォークソングの名曲『橋を作ったのはこの俺だ』を使

って、自分が教鞭きょうべんをとるいくつかの大学の学生たちに説明してきた。

作詞・作曲はのちにグラミー賞の生涯功労賞も受賞した、アメリカを代表するフォークシンガーのトム・パクストン。日本では高石ともやさんの訳詞と歌で有名になった。おそらく団塊の世代なら、学生運動や労働運動の中で歌った方も多いだろう。

強い腕や強い体で森を切り拓ひらき、橋や道路、そしてこの国を作ってきたのは俺たちだ、自分たちの先祖に偉い人はいない、誰かが命令したからこの国ができたのではない、と歌い上げる。いま聞けば、男性中心主義ではないか、アメリカの先住民のことはどうなんだといったツッコミどころが満載だが、そのツッコミのPC（ポリティカル・コレクトネス）具合もまた、トランプ支持者にとっては怨嗟の対象なのだろう。おそらくかつては民主党支持者の集会で歌われていたこの歌が、いまはトランプ支持者の気持ちを代弁するものになっている。逆にいまの民主党支持者からすれば、歌詞の一部は反知性主義にも聞こえるだろう。

この国を作ったのは俺たち（白人男性）だったはずなのに、いまでは偉い政治家や学者たちがいろいろと理屈をつけて、ニューカマーたちの方を優遇している。トランプ氏への支持の広がりのの起点はここにあった。そしてその源流には、これから本書で幾度も取り上

げていく「寂しさ」がある。取り残されたという感覚。そして「あいつらだけがうまくやっている」という怨嗟。

エレファントカーブが示す先進国中間層の経済的な停滞は、その後、保護主義的な貿易政策や国内産業の重視といった政策指針の根拠として議論されてきた。一九九〇年代以降のグローバリズムこそが、自分たちの停滞の原因だという主張だ。そしてまさにいま、その議論の方向の通り、トランプ関税の嵐が吹き荒れ世界を大混乱に巻き込んでいる。経済的な混乱だけで済めば不幸中の幸いだが、よく言われるようにこれが一九三〇年代の再現にならないことを願うばかりだ。世界有数の工業国になって一等国の仲間入りと浮かれていても、実際には西洋列強に見下される日本人の寂しさが、あるいは第一次世界大戦の戦勝国なのに経済が一向に上向かないイタリア人の取り残された感覚が、そして「ユダヤ人だけがうまくやっている」というドイツ人の怨嗟がファシズムを生んだように。

日本人の寂しき——小さな谷の住人たち

このエレファントカーブは、個人の所得の問題を扱っている。だからこそ、これがトランプ支持層の心理分析に役立った。しかし、もう一点、注目しなければならない事柄がある。それは、この象の鼻の折れ曲がった小さなV字部分が、そのまま日本国なのではないかという特殊事情だ。

日本にはイーロン・マスクやマーク・ザッカーバーグのような数兆円単位の資産家は少ない。一方で格差が広がっているとはいえ、欧米に比べると失業率、特に若年層の失業率は相対的にとても低い。非正規、低賃金、円安などのマイナス要因は数々あるが、それでも年収約二〇〇万円から七〇〇万円あたりに半分近い世帯が収まっている。これはほぼそのままエレファントカーブのX軸75から90あたりの領域だ。

似たような経済構造、社会構造を持つ韓国と比べても、日本はやはり格差が小さい。韓国においては高所得高成長の財閥一家と、その財閥系企業に勤める人々に比して、そこからはじき出されてしまった人々との格差が大きく、それが社会不安の原因となっている。

中堅企業が少ないので、大学卒業時点で大きな企業に就職しないと人生の負け組扱いとなる。地域間格差も厳しい。そして、あまりに経済が急成長し、社会変革が激しかったので、人々の意識の改革がまったく追いついていない。強い儒教社会なので、結婚した際の女性の負担はまだ大きい。それを少しでも緩和しようとする男性たちから「自分たちには徴兵もあるのに女性を優遇しすぎている」と反発が出る。一定数の女性は、この事態に絶望し、結婚をしないか、あるいは海外への移住を考える。

日本は、これほどにドラスティックな事態には至っていない。おそらく私たちの住む国は、世界でもっともコンパクトに、この小さなV字部分に国民全体が暮らしているのだ。ここに日本と日本人独特の（トランプ支持層や欧州の極右とも異なった）寂しさの正体がある。なぜこのことを日本の経済人や政治学者たちは、もっと強く指摘しないのか不思議でならない。これが、先に指摘した日本人独特の「不満」と「いらつき」の正体だ。

批判を受けることを覚悟で書くなら、「事態はそれほど深刻ではない」。

もちろん日本社会にまったく問題がないとは露ほども思っていない。格差の問題も少しずつ広がっている。しかし現状、日本の格差問題は多くが相対的貧困、すなわち可処分所得が少ないことに由来している。理由は複雑だろうが、確実に言えるのは賃金が安くて物

価が高いということだ。失業率は低いから食つてはいけるが、他に使えるお金が少ない。だから教育や子育てに格差が生じやすい。この点は第五章などで詳しく触れる。

それでも他の先進国に比べて、日本はまだまだ暮らしやすく、何より安全で安心だ。だから、少なくとも狭義の「経済格差」が問題の中核ではない。この点を踏まえないと、社会全体の議論がかみ合っていない。

問題は、この小さなV字の谷の中での嫉妬や憎悪は、それ特有のゆがみを見せるという点だ。ここに日本特有の状況がある。それほど事態が深刻でないがゆえに、本人たちさえそれと気がつかない、いや、認めたがらない小さな「いらつき」が起こる。たとえばその「いらつき」は角田光代かぐたさんの小説『対岸の彼女』で克明に描かれた、地方の女子校におけるいじめの連鎖の状況に酷似している。少し長いが引用してみよう。

ナナコとの待ち合わせはしかし以前と同じく校外で、落ち合つて河原へいき、買い食いをしながら、突然生じたカースト制についてよく話したり、笑つたりしていた。

結局さ、のっぺりしすぎてるんだよ、とナナコは言っていた。何もかもがのっぺりしてる。毎日、光景、生活、成績、全部のっぺりしてるから、いらいらして、カースト

みたいな理不尽な順位をつけて優位に立ったつもりにならなきゃ、みんなやっついてられないんじゃないかな。

この学校の生徒たちには選択権がない、だから同じ地点に立っているしかない、というのは、葵も感じていたことだった。そもそも進学校ではなく、学校自体のモットーが設立当時とかわらず未だ「良妻賢母」で、けれど結婚に夢を見られるほど女子生徒たちは前時代的でもない。しかしだからといって高校の偏差値が上昇することはなく、そもそもカリキュラム自体が他の学校とは異なり、ずいぶんのんびりしているように葵には感じられた。中学ではぎりぎり落ちこぼれずにすんだ葵は、この高校でいつも上位の成績をとっていた。けれどもしトップになったとしても、大学進学はほとんどがんばらなければ難しいということをも葵は理解していた。

(中略) 同じ顔ぶれでつるみ続け、文句ばかり言い連ねることを覚え、何も学ばないままそこも卒業し、合コンやナンパで知り合った土地の男と結婚していく。そんな図式が、この町に住んでまだ一年と少ししかたっていない葵にも理解できた。多くの卒業生がたどった経路を、自分たちも遠からずなぞることになるとだれもがうすうす知っている。わかりすぎる未来に対して、早くも倦んでしまった空気が高校二年になっ

てから色濃く流れはじめた。小学生のようなじめをするほど幼稚ではないが、けれど何かむしゃくしゃする、人を見下し順列をつけ優位に立ちたい。そんな気分が、どこにも出口を見つけられないまま鬱積^{うつせき}していつているように、葵には感じられた。

(文春文庫、二〇〇七年)

「けれど何かむしゃくしゃする」「人を見下し順列をつけ優位に立ちたい」。

日本を訪れる多くの中国人旅行者よりも、おそらく日本人の中間層の方がまだ所得は上だ。しかし中国のように経済が成長していれば未来に希望が持てるから、少ない収入でもそれを消費に充てる。冷静に考えればわかることだが、本当の富裕層はドラッグストアで爆買いなどはしないのだ。

だがそれを見た日本の下位中間層は、なんとなく寂しさを感じる。むしゃくしゃする。その寂しさやいらだちは、うらやましさを裏返して、しかしそれを認めたくない人たちが、生活習慣の小さな違いなどをあげつらい、インバウンドはマナーがなってないと嘲笑する。あるいはフェイクニュースをすぐに信じてしまう。

クルド難民に対するいわれなき中傷も、生活保護世帯に対する偏執的な追及も、根は同

じところにあるのだと思う。

本書は、この日本特有の「寂しさ」「いらつき」「不安」を基調低音として書き進めていく。そこでまずこのような現象を仮に「微温的格差」あるいは「日本型の微温的格差」とでも名づけておこうか。

さて、このような顕在化しにくい怨嗟の念に対して、はたしていったいどのような対応策が見出せるだろうか？ 何しろ対象は、本人たちも認めていない、認めたがらない寂しさなのだ。「寂しいんだね」と声をかけたところで、「寂しくないよ、放っておいてくれ」と言われるのが関の山だ。

どうすればいいのだろうか。

どうしようもないのだろうか。

書名の通り、それでもあきらめることなくこの「寂しさ」と向き合い、そして私の専門領域である芸術、あるいは文化をキーワードに、小さな処方箋までを示せればと考えている。おそらくそれは本当に小さな処方箋で、とうろう蠅の斧おのにすらならないかもしれないが。

ねばり強く状況に絶望せずに、いま、できることは何かを考えていきたいと思う。明日に向かって。

本書の構成

本書はこれまでに書いてきた『芸術立国論』（集英社新書、二〇〇一年）、『新しい広場をつくる―市民芸術概論綱要』（岩波書店、二〇一三年）、『下り坂をそろそろと下る』（講談社現代新書、二〇一六年）などの集大成的性格を有している。これまでの著作との重複が非常に多いがお許しいただきたい。また本文中にある城崎きのさき国際アートセンター（兵庫県豊岡市）や私が学長を務める芸術文化観光専門職大学の設立の経緯、あるいは豊岡演劇祭の詳細について、さらに関心のある方は『但馬たじま日記―演劇は町を変えたか』（岩波書店、二〇一三年）を参照していただけるとありがたい。

第一章で、先の『芸術立国論』刊行以来二五年間の節目節目に、私が書いたいくつかの文章を引用し、現代日本が抱える問題の所在を明らかにしたい。第二、第三章では、社会における芸術の役割を多様な角度から考察する。特に観光と芸術の関係は比較的新しい論考になる。第四、第五章では処方箋として「新しい広場」としての劇場や公共文化施設の役割、ならびに「文化による社会包摂」について大きく稿をさいた。第六章では少子化対

策と文化政策の関係、第七章では教育政策、主に大学入試改革と文化政策の関係について述べる。第六、第七章は文化格差、体験格差の問題も扱っていく。

領域が多岐にわたるので、関心の薄いところは読み飛ばしていただいてもけっこうだ。いずれかの視点で、芸術の新しい役割について視野が広がる瞬間があるなら幸いに思う。